

タイトル「チンチン電車の看板娘」

作者 津島次温

○登場人物

つぐ子（15歳） 国民学校高等科学生

サキ子（21歳） つぐ子の姉

昌明（23歳） つぐ子の兄

菅野（26歳） 区役所職員

耕介（15歳） 国民学校高等科学生

タカヨ（20歳） 主婦

S E 電車が止まる。

サキ子「七条西洞院。七条西洞院」

S E 乗客の乗り降り

サキ子「発車しまーす」

S E 全速力の駆け足

つぐ子「わーっ！待って、待って！（ぜいぜいと息を切らせて喘ぐ）間に合った。ああ、良かった」

サキ子「つぐ子」

つぐ子「ああ、サキ姉ちゃん、今日も早朝から車掌のお勤め、ご苦労様です」

サキ子「また寝坊か」

つぐ子「マア兄ちゃんが起こしてくれて、助かった」

サキ子「ちゃんと朝ごはん食べた？」

つぐ子「大丈夫。（息を整えて）昭和二〇年二月八日。倉本つぐ子、これより京都第一国民学校へ登校いたします

す！サキ姉ちゃん、朝ごはんありがとう。おいしかったわ」

サキ子「まったく」

つぐ子「へへ、サキ姉ちゃんのモンペ姿も見慣れてきたなあ」

サキ子「これなあ。制服着るのも贅沢なことになってしもうてね。ちよっと前までは憧れの電車ガールやったのになあ」

つぐ子「大丈夫。モンペ履いててもサキ姉ちゃんの美貌は何も損なわれへん」

サキ子「どうも、ありがとう」

つぐ子「サキ姉ちゃんはこの京都北野線チンチン電車の看板娘や」

サキ子「あんたは言い方が大袈裟や」

つぐ子「ん？チンチンの看板？」

サキ子「アホ。縮めて言わない」

つぐ子「ははは。とにかくモンペを履くのは立派なことや。今はお国のためにみんなで頑張らなアカンときやから」

サキ子「そうやな」

つぐ子「『欲しがりません、勝つまでは』や」

サキ子「勝つまでは、か」

つぐ子「そうや、日本が勝つまで、みんなで力を合わせて戦うんや。私も今日は薙刀の稽古や。腕が鳴るなあ」

サキ子「京都一の女流剣士は威勢がええなあ」

つぐ子「せや、ところでサキ姉ちゃん、あの話、どうするん？」

サキ子「あの話？」

つぐ子「とぼけんでええやん。ほら、昨日おばさんが持つて来たお見合いの話」

サキ子「ああ、あれはお断りしようと思う」

つぐ子「なんや。ええ話やと思うたのに」

サキ子「配給もままならん今の御時勢で、お見合い言われてもね」

つぐ子「何を言うとな。それとこれとは別の話やん。

あ、サキ姉ちゃん、もしかして私とマア兄ちゃんのことを気にしてるんちゃう？」

サキ子「え？」

つぐ子「ウチにはお父ちゃんもお母ちゃんももう居らんし。私とマア兄ちゃんの世話せなアカン思うとるんち

やう？それやったら心配せんでエエ。私らは何とでもなるんやからな」

サキ子「そんなんやないよ」

つぐ子「姉ちゃんは、姉ちゃんの幸せを考えるんやで」

サキ子「あんた、おばさんみたいやな」

つぐ子「やって、もったいないでえ。あの人、写真見たらすごい男前やったやん」

サキ子「そこかいな」

耕介「あ、あの」

サキ子「はい」

耕介「お、おはようございます」

サキ子「耕介君、おはよう。今日も工場勤務？」

耕介「はい！」

サキ子「がんばってね」

耕介「ありがとうございます！」

つぐ子「耕介、おはよう」

耕介「（愛想なく）あ、つぐ子」

つぐ子「勤劳動員、ご苦労さん」

耕介「おお」

つぐ子「ちよっと、何やの。サキ姉ちゃんの時と態度が

えらい違うやんか」

耕介「そうか」

つぐ子「そうか、やあらへん。同級生イチの美人が折角

挨拶してあげとるというのにやなあ」

耕介「うるさい。お前みたいな男女に興味は無いわ」

つぐ子「なんやてえ！男女てどういう意味や」

耕介「意味もへったくれもあるか。お前、ホンマに女か？

チンチン生えとるんちゃうか？」

つぐ子「そんなもん生えてないわ！」

耕介「男女のチンチン娘や！」

つぐ子「チンチン娘はサキ姉ちゃんや！」

サキ子「ちがーう！」

つぐ子「あ」

サキ子「まったく、こんなところで喧嘩しない」

つぐ子「そやかて、耕介が」

S E 木鈴

サキ子「二人とも、早よ、乗って」

つぐ子・耕介「はい」

サキ子「ほんまにあの二人は……あ」

S E 木鈴

サキ子「さあ、頑張るか」

S E 電車の連絡ベル

サキ子「発車しまーす！」

S E 電車が走り出し、遠ざかる。

S E 木刀で木の板を叩く。繰り返す。

昌明「(疲れた様子) エイ！ ヤア！ エイイ、ハアハア……

ヤア！」

つぐ子「マア兄ちゃんもつと鋭く。力を入れな木刀が死
んどる！」

昌明「エイッ！ エイッ！」

つぐ子「そう！ 素早く！」

昌明「エイッ！エイ（咳き込む）」

つぐ子「マア兄ちゃん、大丈夫？」

昌明「ああ、大丈夫や。気にせんでエエ」

つぐ子「もう今日の稽古はこれくらいにしよう」

昌明「ああ。そうしようか」

つぐ子「はい。お白湯」

昌明「はあ、つぐ子、ありがとう」

つぐ子「マア兄ちゃん、無理したらアカンで」

昌明「国民学校一の女剣士がウチに居るんやから。兄ち

ゃんも鍛えてもらわんとな」

つぐ子「でも兄ちゃんは喘息持ちなんやから」

昌明「大丈夫や。喘息なんかなあ、体鍛えたらきつと治

るんや」

つぐ子「でも、無理したって強おならへんで」

昌明「なあに、大丈夫や。さあ、もう一稽古いこう」

つぐ子「そうか。よし。じゃあ、やるか」

S E 玄関の扉が開く

サキ子「（憂鬱そうに）ただいま」

つぐ子「あ、サキ姉ちゃん、おかえり」

昌明「おお、サキ子、おかえり。今日な、工場と一緒に働いとる農家の人からな、野菜を分けてもらうたんや」

つぐ子「すごいで。サツマイモだけちゃうで。人参やら

白菜やら、むっちや豪華やで」

サキ子「ふうん」

昌明「あれ？」

つぐ子「サキ姉ちゃん？」

サキ子「（溜息）」

昌明「どないしたんや？」

サキ子「明日から車掌じゃのうて、別の仕事に就けて言われた」

つぐ子「別の仕事？」

昌明「なんや？別の仕事で」

サキ子「運転士」

つぐ子「え、運転士？」

サキ子「男の人はみんな戦地に行ってるから運転士が足りへんの。せやから、私らが代わりにやらんと電車が走らへん」

昌明「そうか。それは大変なことやな」

つぐ子「素晴らしい」

昌明「え？」

つぐ子「素晴らしいわサキ姉ちゃん。戦地で働く皆さんの代わりに大事な仕事を勤めるんや。素晴らしいで」

サキ子「そうかもしれん。けど、運転士は大変やからな」

つぐ子「なんで？今とおんなじ電車に乗る仕事やん」

サキ子「同じちやうよ。責任の重い仕事やし。『まいたまいた』で力も要るから」

つぐ子「まいたまいた？」

昌明「ブレーキのことや」

サキ子「ブレーキのハンドルは大きくて重たいの。それをグルグル回さなアカン。」

つぐ子「あ、前に言うてたな。ブレーキのハンドルを回してて胸にぶつけてエライ怪我した運転士さんが居ったって」

サキ子「そうや。明日から運転の訓練やて。それもその実習の先生がなあ」

つぐ子「先生が？」

サキ子「乃木大将やねん」

つぐ子「乃木大将」

サキ子「乃木大将みたいな口ひげを伸ばした強面の運転士さん」

昌明「それが先生か。そら恐そうやな」

サキ子「ホンマに恐いて。(大きなため息)」

つぐ子「羨ましい」

サキ子「は？」

つぐ子「乃木將軍の訓練やで。そら羨ましいで」

サキ子「あんたは呑気でええなあ」

つぐ子「うん？ちよつと待ってな。サキ姉ちゃんが運転

士、いうことは車掌は別で要るいうことやんな」

サキ子「そうやな」

つぐ子「じゃあ、それ、私がやるわ」

サキ子「え？あんたは学生やろ。市電の職員ちゃうやん」

つぐ子「ふっふっふ。それがやな。来月から私らも市電

で働くんや」

昌明「どういうことや？」

つぐ子「勤労働員が始まるんやって」

サキ子「勤労働員？」

つぐ子「サキ姉ちゃんが居るし、私は市電の車掌の仕事

を志願した」

サキ子「そうやったんや」

昌明「おんなじ電車で働けたらええな」

つぐ子「そしたら、美人姉妹電車やな」

サキ子「つぐ子……あんたホンマに呑気やな」

つぐ子「もうすぐ私も、チンチン電車の看板娘や」

サキ子「それはもうええって」

つぐ子「サキ姉ちゃん、よろしう」

SE 小鳥

サキ子「ホンマに一緒に電車で働くことになるとはなあ。

つぐ子、準備出来た？」

つぐ子「ハアハアア、朝一番からポール回しはきついわ。

サキ姉ちゃん、手伝うてよ」

サキ子「何やってんの。車掌の仕事やろ」

つぐ子「そんなこと言うたかて、重いし」

サキ子「しゃあないなあ。ええか、ロープをしっかり握

って、ちよつとポールを上げたら上の手を下に持ち替

えて、ほら、ゆっくりゆっくり、」

つぐ子「こんな感じ？」

サキ子「そうそう。最後は架線の位置をよお見て。ゆっ

くりやで」

つぐ子「よいっしょ……入った！サキ姉ちゃん、ポール
が架線にハマった！」

サキ子「はい。ほな、行こか」

つぐ子「了解！市電北野線、一番電車、出発！」

S E 連絡ベル

電車が走り出す

S E 電車が止まる

つぐ子「堀川御池。堀川御池」

S E 乗客が乗り込む

つぐ子「おはようございます。（別のお客さんにも）おは
ようございます」

タカヨ「よいしょ。あら」

つぐ子「おはようございます」

タカヨ「おはようさん。あなた、学生さん？」

つぐ子「はい、勤労働員で車掌になりました」

タカヨ「そう、えらいなあ」

S E 電車が走り出す。

つぐ子「私、倉本つぐ子っていいます」

タカヨ「そう。私は江沢タカヨです」

つぐ子「タカヨさん。よろしく」

タカヨ「ええ、こちらこそ」

つぐ子「朝早くからお仕事ですか」

タカヨ「いいえ。朝一番にね、五条天神にお参りするの

が私の日課なの」

つぐ子「五条天神？西洞院の」

タカヨ「そう。あそこは医者の方神様やからね」

つぐ子「誰か、病気の家族が居るんですか？」

タカヨ「いいえ。主人の無事を祈ってるの」

つぐ子「旦那さんの？」

タカヨ「去年、出征したの」

つぐ子「兵隊さんになったんですか？」

タカヨ「ええ。だから、戦地で病気になったりしないよ

うに、五条天神にね」

つぐ子「立派です」

タカヨ「え？」

つぐ子「戦地で働く兵隊さんはみんな立派です。旦那さ

んの武運長久をお祈りしてるタカヨさんも立派です」

タカヨ「武運長久？」

つぐ子「撃ちてし止まん、ですよね」

タカヨ「……そうやね。あなた、御兄弟は？」

つぐ子「姉と兄が居ます。この電車を運転してるのが姉

です」

タカヨ「そうなんや。お兄さんは？」

つぐ子「勤労働員で亀岡の工場に通ってます」

タカヨ「兵隊には行かんかったの？」

つぐ子「兄は、丙種合格です」

タカヨ「丙種」

つぐ子「甲乙丙の丙です。合格いうても一番下の合格で

す。喘息持ちで、ちゃんとした兵隊には向かへんで」

タカヨ「そう」

つぐ子「でも、お国のために工場で一生懸命働いてます。

兄も立派です」

タカヨ「そうやね。みんな、立派や」

つぐ子「うん、立派や」

S E 電車が止まる

乗客の乗り降り

つぐ子「西洞院松原。西洞院松原」

タカヨ「つぐ子ちゃん、これからも一番電車でお勤めす

るの？」

つぐ子「はい」

タカヨ「それやったら、また会えるなあ。よろしくね」

つぐ子「はい。よろしく、タカヨさん」

タカヨ「それじゃ」

S E 連絡ベル

電車が走り出す

S E 電車が止まる。

つぐ子「千本中立売。千本中立売」

S E 乗客の乗り降り

つぐ子「おはようございます。（別の客に）おはようございます。（振り向いて）おは……わっ」

菅野「（無感情）おはようございます」

つぐ子「お、おはようございます」

菅野「失礼します」

S E 菅野の靴音

つぐ子「あの人も一番電車の常連さんかなあ。愛想無い

し、ちょっとこわいわ」

菅野「（小声で般若心経を唱える。聞き取れない）」

つぐ子「あの人、何かブツブツ言うてる。何言うてるんやろ」

菅野 「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一

切空厄……」

つぐ子 「何？お坊さん？気持ち悪う」

菅野 「般若心経を小声で唱え続ける」

S E 電車が止まる

つぐ子 「堀川丸太町。堀川丸太町」

菅野 「羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶」

つぐ子 「うわ、あの人こっち来る」

菅野 「ありがとうございました」

つぐ子 「いえ、こちらこそ」

菅野 「失礼します」

S E 菅野の靴音。去っていく。

つぐ子 「愛想ない。けったいな人やな」

S E 連絡ベルを鳴らす。

電車が走り出す。

S E 大勢の人の乗り降り

つぐ子「うわあ、通勤の時間になったからよおさん乗って来はるわ。よし、元気よくいこか」

耕介「(欠伸) ふあゝ。眠う」

つぐ子「おはようございます！」

耕介「(驚く) わあっ！」

つぐ子「今日もお勤めご苦労様です(元気良く歌う) 見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば、天地の精気浚刺と、希望は踊る大八洲」

耕介「つぐ子」

つぐ子「あ、耕介、おはよう。今日も工場か。勤劳奉仕、ご苦労さん」

耕介「何でつぐ子が車掌やとんのや」

つぐ子「何でって、勤劳奉仕やんか」

耕介「勤劳？サキ子さんは？」

つぐ子「サキ姉ちゃん？ ああ、サキ姉ちゃんは運転に回

ってるわ」

耕介「運転？（運転席の方を覗き込む）」

つぐ子「そうや。あれ？ ははあ。なあ、耕介」

耕介「何や」

つぐ子「サキ姉ちゃん、呼んだろか？」

耕介「え？ 別に呼ばんでええ」

つぐ子「そんなこと言うて。考えてみたらあんたの通う

てる工場って北野線の駅からは遠いなあ」

耕介「ど、どうでもええやんか」

つぐ子「狙いはサキ姉ちゃんか」

耕介「アホ！ そんなんちゃう」

つぐ子「分かりやすいなあ。顔、真っ赤やし」

耕介「ほっといてくれ」

つぐ子「サキ姉ちゃん！」

耕介「わっ！ アホ！」

サキ子「（運転席から）何？ あ、耕介君」

耕介「お、おはようございます」

サキ子「毎日、ご苦労さん」

耕介「は、はい！ ありがとうございます！」

S E 連絡ベルを鳴らす。

つぐ子「ほな、出発します」

S E 電車が走り出す。

つぐ子「よかったなあ。話できて」

耕介「うるさい。早よ、向こう行け」

つぐ子「でもな、サキ姉ちゃん、もうすぐ結婚するかもしれないんで」

耕介「え！」

つぐ子「あれだけのベッピンやしな。お見合いの話もよ
うさん来とるしな」

耕介「そうなんか」

つぐ子「あ、ちゃうわ。サキ姉ちゃんには、もうすでに
エエ人が居るんやわ」

耕介「ええ！」

つぐ子「お見合いの話はみんな断ってるしなあ。それに
帰りの遅い日が最近チョコチョコあるなあ」

耕介「ホンマか」

つぐ子「もうすぐ私にも新しいお兄さんが出来るのかな

あ、アハハハ。って、嘘やって。サキ姉ちゃん、いつ

つも六時には帰ってきてるし。あれ？耕介？」

S E 電車が止まる。

サキ子「つぐ子、駅名復唱」

つぐ子「あ、ごめん。四条堀川。四条堀川」

サキ子「仕事に集中しいや」

つぐ子「はあい」

サキ子「もう」

耕介「あの、サキ子さん」

サキ子「あら、耕介君、どうしたん？」

耕介「サキ子さん、幸せを祈ってます」

サキ子「はい？」

耕介「それじゃあ」

サキ子「え、ちよっと耕介君、どないしたん」

つぐ子「悪いことしたなあ。まあ、ええか」